

私の7回の訪中記

和田 宏

私的な且つ古い話で恐縮です。

私は、第二次世界大戦が終わった翌年の1946年1月生まれであり、日本が戦前の軍国主義国家から民主主義国家へ、また英語を義務教育で勉強する時代に育ちました。アメリカは良い国なのだと信じました。しかし、高校生になって私の思想に変化を来しました。アメリカ軍の基地が日本各地にあり、ベトナム戦争をしているアメリカに日本が追従していることやアメリカが中国封じ込め政策をやっているのは変だなあと、ふっと考えるようになりました。私の父は、戦前北京に置かれた日本政府の出先機関に勤務し、姉は1941年北京の生まれです。父が北京勤務を終えて神戸港に戻って来たのは、真珠湾奇襲攻撃前日の1941年12月7日でした。北京に居た頃の父母は新婚ほやほやで、母は、阿姨（お手伝いさん）に家事を任せて、日本の銀座に当たる王府井へ溜達溜達（ぶらぶら）と買い物や散歩に出掛けるという極めて楽しい日々を送りました。父は京劇が好きで、梅蘭芳の京劇をよく見に行ったそうです。帰国に際して京劇のレコードをお土産に持ち帰るほどでした。

私が早稲田大学政治学科の学生になった1965

年、19歳の時から私は日中恢复邦交（日中国交正常化）運動に身を投じ、人民中国や北京週報などの拡販に情熱を燃やしました。何故なら、戦前に罪なき大勢の中国人らを戦争で殺したことを謝らず、隣国と国交さえ無いと言うのは不自然であり不幸であると思ったからです。プロレタリア文化大革命が起きて日中友好協会が分裂した時は毛沢東派に移り、日光の戦場ヶ原でキャンプをしながら毛沢東語録を暗唱しました。中ソ論争で、ソ連人の指導者ら1万人がサーッと引き揚げられてしまった中国は、手のひらを返したようにニクソンのアメリカとパッと手を繋いで、1972年2月アメリカと国交を回復させました。慌てて田中角栄が訪中して同年9月、日中国交回復（日本では日中国交正常化と言っています）が成りました。1973年5月、来日した日本語ペラペラの廖承志が佐世保湾を視察した際、私は一緒の船に乗りました。

〈初めての訪中〉

私が初めて中国を訪問したのが1975年5月。当時勤務していたNHK佐世保放送局の上司に休暇を申請して、『長崎県親善訪中団』の団員の一人として、北京と上海を訪問しました。19歳の時から日中国交回復、友好運動を続けてきた



散髪の銅像（1975年5月）



洋車に二人で乗っている（2010年10月）



弁論大会（2011年3月）

29歳の私は、念願が叶い胸がときめきました。江青・張春橋・姚文元・王洪文の“四人組”がまだ頑張っていて、文革の余熱の残る時期でした。両手に持った花を振りながら“热烈欢迎！（ルーリエホワンイン）欢迎、欢迎、欢迎！”と叫ぶ少女達の列の中を歩いて、工場や学校などを参観しました。訪問各所では、必ず毛沢東を讃える演説が行われました。上海の夕方、ホテルから黄浦江沿いの街路へ夕涼み出してみると、あっと言う間に大勢の中国人に取り囲まれました。庶民の生活ぶりや服装などを見た時、その貧しさに一種の郷愁や哀れを覚えました。北京では、紫禁城、万里の長城、明の定陵、天壇などを参観させてもらいました。

〈2回目の訪中〉

1998年夏、新潟放送局勤務の時、ローカルニュースのキャスターをしていた私は、新潟県と黒竜江省が友好県省の縁組を締結して5周年を記念し、県主導で結成された『友好の翼』という訪中団に随行する形で、哈尔滨市に一週間滞在し、番組制作者、カメラマンと3人で様々な話題を取材しました。黒竜江省政府を訪問した様子を伝え

る私のレポートは、北京テレビ台とNHK渋谷の放送センターを通じて日本に衛星中継で送信され、当日のNHK新潟放送局のローカルニュースで放送されたのです。帰国後は私の撮った中国庶民の生活ぶりなどのレポートを5回連続放送したほか、訪中団の団長を務めた副知事や哈尔滨市からの新潟大学の女性留学生にも出演してもらって、『你们来了哈尔滨』というローカル番組も放送しました。その時の嬉しい気持ちを中国語で書くと、「去了哈尔滨的时候，气候是非常热的7月末。白天的非常忙的工作结束后，在宾馆的餐馆吃饭，从凉台呆呆地望着哈尔滨的夜景，凉快的夜风柔和地打在我的脸，那时候的心情舒畅，不能忘记。」

〈3回目の訪中〉

発展著しい上海を見学するための個人旅行

で、2004年5月に主な名所旧跡を観光しました。上海は、1975年の最初の訪中以来29年ぶり、私は58歳。中国共産党第1回大会の行われた建物や、浦東地区に建設された東方明珠電視塔を見学。黄浦江の夜の遊覧船に乗船しました。戦前の上海は、魔都と称される程の魅力・魔力を持っていたと言われますが、夕風を頬に受けながら川島芳子も李香蘭も活躍した昔へ想いを馳せました。魯迅や郭沫若らと金子光春、横光利一、林芙美子、武者小路実篤



筆者（2011年10月）

など、日中知識人のサロンとなった内山完造が経営した内山書店跡も残されていました。

〈4回目の訪中〉

2010年10月、中日友好協会の招待による『日中友好協会創立60周年祝賀大会』に出席する為、「神奈川県日中友好協会」事務局長と2人で「人



18人の集合写真（2013年3月）

民大会堂」に入りました。直前に尖閣諸島海域で中国漁船による衝突事件が発生したので気を揉みましたが、思い切って参加した次第です。早朝から長蛇の列に並んで、毛沢東主席の遺体を見学することも出来ました。洋車（人力車）に乗って郭沫若の旧居や古い北京の町並みの保存地区を見て回りました。私は学生の頃から毛沢東の著作を読み漁り、“地下活動”をした“危険分子”（笑）だから、平均的な日本人と比べて“中国覇権”ですが、まだまだ中国の政治経済も前時代的な体制から脱し切れず、一般庶民の生活レベルも低いと感じました。北京駅周辺の舗装は、あちこち剥がれたまま。歩道橋の上では“發票！ 發票！（ファーピャオ、ファーピャオ）”と言いながら、偽の領収書を売るおばさんがたむろしています。王府井の目抜き通りでさえ、地面に土下座した若者が首を千切れんばかりに振って、お金を恵んでくれとジェスチャーをする乞食がおり、ムシロに母親と見られる老婆が死んだように寝ていました。でも誰もが知らんぷりして通り過ぎて行きます。

〈5 回目の訪中〉

2011年3月、『神奈川県青少年訪問団』の団員として青島市と瀋陽市を訪問。参加者は、高校生3人を含む15人。私達の乗った飛行機が、丁度東シナ海の上空を飛んでいた2011年3月11日14時46分、日本では『東日本大震災』が起

きました。青島空港に着陸し、バスで市内に向かう途中に仲間達が携帯電話で大地震の発生を知り騒ぎ出しました。青島の総領事館に入って、その凄まじい惨状を中国のテレビニュースで見て初めて知ったのです。国際電話で妻子の無事を確認し、ホッと胸を撫でました。青島市ではドイツが始めたビール工場を見学。瀋陽市に赴き、東北育才外国語学校では授業参観し、高校生による日本語弁論大会の審査員を務め、高校生に演説のコツを一寸だけ伝授。訪問中は、連日連夜中華料理の大盤振る舞いの贅沢三昧。日本では大震災で大変なことになっているのに罰が当たらないかと心配するほどでした。

〈6 回目の訪中〉

辛亥革命100周年に当たる2011年10月、5泊6日の日程で中国・広東省を訪問。広東省人民政府はじめ、孫文の故郷・中山市、肇慶市、東莞市の3市の人民政府の招待を受けて、それを記念する『神奈川県日中友好協会』代表団としての訪中でした。中国の南部沿岸都市は、経済発展が極めて目まぐるしく圧倒されました。町には6車線の大きな道路が走り、両脇と中央分離帯は、亜熱帯地方らしく手入れの行き届いた緑と花がどこまでも生い茂っていました。主な各都市は新幹線で結ばれ、高速道路が縦横無尽に走り、大きなビルや高層マンションが林立。また工業団地、先進的IT産業などの展覧場、大学、合弁の自動車工場、辛亥革命博物館、放送局などのその立派さ、豪快さには度肝を抜かれました。中国の目覚ましい発展ぶりに驚嘆です！とうとう日本は追い抜かれた、という実感でした。我々の訪問は地元のテレビでローカルニュースとして取り上げられました。連日連夜、中国料理のフルコースで大歓待を受け、とても食べきれず、飲み切れず。乾杯ー！ 乾杯ー！ の連続です。何かやれと皆から催促され、止むを得ずピエロ役に徹した65歳の私が中国語で歌を歌い、踊りました。中国人らも一緒に手を取り

合って大いに盛り上がり……。辛亥革命の歴史や毛沢東のスローガンを知っていて、それを中国語で叫ぶのは私しかいませんから。哈哈大笑ー！！

中山市の通りには、“辛亥革命 100 周年”というスローガンがあちこちに貼ってあったものの、我々を接待してくれた関係者達から、それに関連した話題や意義、孫文の“三民主義”とその後の中国共産党による指導・変革との繋がりの位置付けについての発言が聞かれなかったのは、物足りませんでした。中国人達が、経済至上主義に偏り過ぎているように私には見えませんでした。孫文の提唱した“三民主義”を簡単に言えば、「民族主義」は当時の中国が列強に浸食されていたので、それからの中華民族の独立と統一を意味し、「民権主義」は清朝を倒して封建的な専制政治体制に終止符を打ち、自由と平和の共和制民主主義政治を実現することであり、「民生主義」は、博愛に満ちた庶民生活の質の向上を意味します。これは、フランス革命の時のスローガンである自由・平等・博愛に通じるものです。つまり自由は、中国の独立である「民族主義」に当たり、平等は「民権主義」を意味し、博愛が「民生主義」に当たります。

そこで私は、隣に居た大学教授の中国人に、こっそりと『民族主義は、毛沢東が実現した。民生主義は鄧小平が改革開放政策によって国民の生活水準をあげて実現した。しかし民権主義は、新中国では普通選挙も行われず、共産党の事実上の独裁で未だ実現していない。孫文が死に際に言ったように“革命未だならず”だと思いがあなたはどう見るのか？』と聞いたら、『最後の民権主義は、なお 10 年、20 年かかるか、もっとかかるか判らない。』と答えたので、この教授は少しは判っているんだなあと思いました。

〈7 回目の訪中〉

2013 年 3 月、瀋陽市と盤錦市を神奈川県日中友好協会の代表団として訪問。瀋陽市の全ての

川は氷結していました。デパートは綺麗で何でも揃っていました。価格は高く、外国人客と見ると決して値段は下げてくれませんでした。マンションやビルの建設ラッシュでしたが、ちゃんと売れるのだろうか？と心配になりました。高校の英語の授業は、先生・生徒は全て英語を使っていました。私達が 5 日間宿泊した瀋陽市のホテルは、李香蘭も泊った旧大和ホテルでした。

中国は建国後、一度も無記名普通選挙をやったことがないし、一党独裁。言論の自由なし。都市と地方の格差。幹部の腐敗・賄賂。一人っ子政策による高齢化の到来など、山のような課題を抱えています。一方では GDP 世界 2 位になりましたが、自尊心の強い中国政府は、こうした課題を知らながらも簡単には解決できずに悩んでいます。56 の民族、バラバラの 14 億人をまとめて行くためには少々、強権的な政治を行わなければならないようです。家庭にも、職場にも、社会にも、国家にも、世界にも課題・矛盾・不十分さは存在しますし、人生も“順風満帆”には行きません。うまく行かないからこそ、うまく行くようにしようと言う仕事や役割、使命が生まれるのかもしれないですね。それが人間にとっても、国家のリーダーにとっても、生き甲斐に繋がるのでしょうか。

ところで、日本国内でも私がお勧めの場所があります。古本屋街の神保町には、魯迅ゆかりの内山書店があり、日本に留学した当時 20 歳の周恩来が、よく訪れたと言う中華料理店『漢陽楼』も直ぐ傍らで営業しています。周恩来が好んで食べたと言う“小龍包”を食べられますよ。また日比谷公園内にある中華料理店『松本楼』には孫文の妻・宋慶齡が弾いたピアノが展示されています。你一定能惊动中国人朋友！